特別なことはいらない

松江市立美保関中学校　一年　　井下成親

　僕には二人の姉がいます。一人は健康な体で生まれた健常者。一人はたくさんの病気がある、いわゆる重複障がい者として生まれてきました。その病気の一つに知的障がいという病気があります。

　この夏、僕は初めて知的障がいという言葉の意味を知りました。そして姉がその障がいがあるということも知りました。

「知的障がいって何。」

と母に聞いたら、

「お姉ちゃんのことだよ。」

というので驚きました。続けて母は、脳の病気であることや知能指数がどうだとか説明してくれたけれど、難しくてわからないことがたくさんありました。ただ、脳の発達が遅れる病気であることだけは理解できました。今の医学では絶対に治らない病気なのだそうです。

　母は、優しくて人の悪口や文句を言わない姉のことを「天使だ。」と言います。家の戸じまりを何回もする姉。決まった時間になると外が明るくてもカーテンを閉めてしまう姉。朝なのに「こんにちは」と言ってしまう姉。壁に「部屋に勝手に入ってはいけません」と書いてしまう姉。テンションが上がると大はしゃぎしすぎて母にとめられてしまう姉。けれど、母が夜勤でいない日は僕たちの身の回りのことをしてくれる姉。

　一緒に暮らしていると、姉の行動はこれが当たり前で普通だと思うから気にもしなかったけれど、周りの人たちはどうでしょうか。姉を障がい者だという目で見て、おかしな言葉や行動に気づけば「変なの」と思うでしょう。でも僕はそんなふうに思いません。得意なこと、不得意なことは誰にでもあるし、生きる権利はみんな同じ。本当は姉だって病気のない体で生まれてきたかっただろうと思うのです。それなのに姉は

「障がいがあるお姉ちゃんでごめんね。不自由さはあるけれど、生まれつきだから、これが当たり前だと思ってる。私はみんながいるから幸せだ。」

と言います。

　僕も同じです。姉は姉なのです。それなのにどうして障がい者という言葉を使って分け隔てをする人がいるのだろうと思います。だから僕は、一人でもたくさんの人に姉の病気を知ってもらって、できないこともお互いが助け合い、支え合えば、姉のような病気の人も暮らしていくのに何の問題もないと伝えたいです。そして、みんなに障がいがあっても、かわいそうだね、とか大変だねと決して思わないでほしいです。

「みんな同じじゃなくていいんだよ。」

今年の四月、僕の入学式で、校長先生が僕たちにそう言われたことが心に残っています。たとえみんなと同じではなくても、誰もが差別することもされることもなく暮らせるようになることを願っています。特別なことはいらない。僕たち家族の毎日の生活が、当たり前で普通であるように。